

巡査は怒つた。

俺は昂奮して、小便を布團の中へヒツタリした。

好く寝てゐる子供もある。

俺は水のみたいとか言つて騒いだ。

何故此んな所へ俺をねかせるのか、それから俺は留置場の中へ入れられたものと見える。

格子のネサに坐つて観音經を言ひ乍ら氣が遠くなる。

水を小砂利の上へバラ撒く音がする。

巡査がサーアールを引き抜いて、上段に構へながら、ヤーツと格子の間から俺に向つて突き出す。

俺は昂奮して何もかもが白く見えて又氣が遠くなる。

『高橋君、しつかりせんか、つつゆん』

舌打ちしながら二人の刑事が俺を引き立て、汽車に乗せる。

途中で俺が死に掛けたら、俺の乗つてゐる客車丈聯結を解いて、引き放す事の出来るように、